

2021年度

三重大学 人文学部法律経済学科

特殊講義「協同組合論」



<第5回>

「消費者と協同組合」

中桐 聖／生活協同組合コープみえ 伊賀センター長

第5回（11月1日）：受講56名（対面13名、リモート43名）

社会の情勢は10年20年前と比べ大きく変化している。この移り変わりの速度は今後ますます増していくであろう。生協が発足時から大事に取り組んできた「食の安全」は、社会全体で食品の品質が向上することにつながった。嬉しいことであるが、差別化がなくなりつつもある。

宅配事業は、個人宅配が伸長する中で、「班」が主流だった時のような組合員との関係づくりが難しくなっている。組合員が個人宅配を利用する動機の多くは「利便性」である。コロナ禍で、多くの方がコープみえに加入されたが外出の自粛で買物に困ったからだと思う。しかし、いくつかの選択肢がある中で、なぜコープみえが選ばれたのか、これまでの取り組みが評価されたのかもしれない。しかし、コロナ禍が終息した時、加入していただいた方が利用を続けていただけるかの予測は難しい。「よりよい暮らし」の実現にむけた運動や活動をどのように伝え、知っていただくかが重要になると考えている。

現状を踏まえて、どのようなことができるかをしっかり考え、新しい時代を築いていかなければいけない。

【第5回／講義の要旨】

- ・協同組合原則は、協同組合がその価値を実践に移すための指針である。第7原則は「コミュニティへの関与」である。組合員のニーズは地域のニーズであり事業や活動は地域社会との連携が必要である。コープみえの活動も第7原則に重点をおいて取り組んでいる。
- ・生協は、組合員が共通のニーズと願いを、事業を通して実現するため自発的に手を結んだ人々の自治的な組織である。「こんな商品がほしい」「こんなサービスがあると便利」といった暮らしの中から生まれる様々な願いを組合員が力をあわせることで実現している。
- ・コープみえは、2003年3月21日に4つの生協が合併して誕生した。2020年度末には組合員数21万1000名、供高237億円、出資金45億円となった。2019年の総代会で「SDGs行動宣言」を採択した。誰一人として取り残さないことを誓った重要な目標であり、組合員との絆を大切に地域や行政、諸団体、メーカー、生産者と連携して目標の実現に貢献する。
- ・最近、日本ではエシカルな考え方に基づく消費「エシカル消費」が注目されている。「エシカル消費」は、環境や社会など他者への視点をプラスする消費のことである。生協は、「誰かの笑顔につながるお買い物」と表現し、「地域」「環境」「社会」「人々」の4つの視点で進めている。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響で、仕事を失った、食べるものがない、住む場所がない等といった様々な生活課題が発生している。組合員へ参加を呼びかけ伊賀市社会福祉協議会に協力する形でフードドライブと、フードパントリーにも取り組んでいる。

第5回講義／受講生のレポート（抜粋）

- ・私は、コープみえを日頃から利用しているわけではないのであまり馴染みがなかったのだが、コープが宅配事業を超えた様々な役割を果たしていることを知り、今後その役割は社会的により重要なものになっていくのではないのかと率直に感じた。また、先週の大学生協の講義の際にも少し触れられていたが、今回の声カードに代表されるように、ユーザーの声というのは生協にとってかなり重要なものであるのだと感じた。お客様の声でサービスを向上させていくのはある種民間企業がサービスを向上させていくのと同様ではあるのだが、助け合いの精神を大事にする生協にとっては、お客様の声はそれ以上に重要なものであり、民間企業を超えたサービスを提供できる所以なのではないかと感じた。
- ・今日私の家にちょうど生協で頼んだ冷凍食品が大量に届いていたのでとてもタイムリーなお話で、このように身近に利用させてもらっている生協の宅配事業がどういった成り立ちでどのような仕組みかを知ることができてよかった。特に、班購入という配送方法は知らなかったので選択肢を新しく学べてよかった。伊賀センターの取り組みとそのアンケートに寄せられた声をみて、エリア会の目的である「自分たちの住んでいる地域を住みやすくしていくことをめざす活動」を果たしていて素敵だと思った。自分の住んでいる地域では何が取り組まれているか調べてみようと思った。
- ・夕食宅配を行いながら見守り活動を行うのは、このコロナ禍において特に重要な活動だと個人的に思いました。コロナ禍ではあまり外出せず、人にもなるべく接触しないでおこうという風潮があり、それによって家族との接触が少なくなったり、知人と接触の機会が少なくなるため、安否確認が遅くなる傾向があると思うので、この事業は高齢の方の生活と命を支えている素晴らしい取り組みだと感じました。
- ・商品活動を促進する取り組みは地産地消も促進することが出来るのでとても良いと感じました。コロナの影響で個人宅配の利用が伸びたと言っていたが、接触を避けるために在宅していても後で受け取るという方がいるのはしょうがないことだが、宅配をすると同時に安否を確認することが出来るというメリットが薄れてしまっていると感じた。すべての取り組みに組合員に対する細やかな気配りを感じたのでこのような考え方がもっと広まればいいのと感じました。余った商品を生活困窮者に回すという仕組みは資本主義の仕組み上、物が余るのは仕方ないことなので、その不足点を補う良い方法だと感じました。
- ・時代の変化やこのご時世柄、地域住民との関係性が薄れてきているということを悲しく思いました。私の地域は班のお届け先を私の家にしていたので小学生のころによくコープさんが家の前で荷物を降ろしているのを見ていて挨拶してましたし、私の家に荷物を取りに来るご近所さんともよく顔を合わせていて関わりを持っていましたが最近は班員も減ってそういう状況なくなっています。地域住民とのつながりを作ってくれていたことに気づかされました。コープさんが一言メモを添えたり、班のお届け先においてあとは地域住民が配達を手伝うなどをしてか変わっていくことはどうかなと考えました。
- ・生協のデジタルでの活用割合、価格へのインプレッション、カタログの閲覧時間などが年代ごとに違っていたことが興味深かった。また、講義の終盤にあったエシカル消費に関する活動については、生協は日々の生活の中で関わることの多いサービスであるために組合員へのエシカル消費の意識を高めるのに効果的であり、他の宅配サービスとの差別化要因になるのではないかと考えた。
- ・地域生協の加入率を表す図が、三重県は全国的に見ても低くなっていたためなぜだろうと思っていたが、宅配事業を中心に展開しているからという理由があることを知って、店舗が少ないとやはり世帯加入率は下がるのだということを感じた。また、班購入よりも個人宅配が増えているということから地域のつながりが薄れていっていることを強く感じた。

- ・今回の講義で特に印象に残った話題は、伊賀エリア会の活動において、フードドライブの取り組みである。十分な食事を取ることができない状況の人々を手助けするだけでなく、余っている食材を募ることで環境面でも良い影響を及ぼすからだ。私自身も食品を消費できず、期限切れで処分してしまうことがある。このようなことがないように、フードドライブ、フードパントリーという取り組みが他の地域でも広がっていくべきだと感じた。また、個人宅配では利便性があるということで生協に加入することが多いということを理解した。コロナ禍では多くの方が外出自粛のため加入したが、収束した際にこのまま利用するのか不安だということだった。そのため、私たちが生協の取り組み内容を広めていき、生協を積極的に利用することが重要であると感じた。実際に私の地域においてコープの宅配事業を班購入で利用していたことを見たことがある。商品を届けられた人同士でコミュニケーションを取り、とても楽しそうに商品を家に持って帰っている。このような取り組みが続いてほしいと思うし、私も利用したいと思う。
- ・「生協の組合員であることが、女性が社会参画を実感するきっかけになった」という話や、伊賀エリア会では組合員たちが主体的に地域をよりよくする取り組みを行っているという話があった。自分が地域や社会の活動に関わっているという自覚は、生きていく中で自信や生きがいを持つことにつながると感じた。次に、生協はこれからどんなことをしていくべきかという話題について。コロナ禍でフードバンクが広く知られるようになったが、利用や協力の仕方など、細かい仕組みを知らない人は多いと考える。そのため、生協がフードバンクに寄付する方法や、受け取りたいときにどうすればよいのかを発信することで、より多くの食料が必要とする人の元へ行くのではないかなと思う。
- ・生協の組合員の高齢化が進んでいることが課題として挙げられていましたが、今あるサービスを応用すれば若年層にも利用しやすいものにできるのではないかなと考えました。例えば、今の時代、夏休みや冬休みなどの長期休みや土日など、学校がない日でも両親が共働きで家にいないという家庭が多いと思います。そういう日は食事に困ると思います。火を使うのは危ないと言われていたので、冷凍食品を電子レンジで温めたり、カップラーメンを食べたり、コンビニに買いに行ったりしていました。また、長期間家を空けるため、留守中の子どもの様子も気にかかると思います。そういうときに、この宅配サービスがあれば、栄養が考えられた食事をとることができ、子どもが無事にいるかを確認してもらえます。「この家には見守りの人が来る」というのは犯罪の抑止にもなりそうです。こうした現行のサービスの応用で若年層の利用を増やし、子どもにとって生協が身近なものになれば、次の世代の加入にもつながると思います。
- ・高齢化が進む社会においては今後ますます買い物難民の増加が予想され、見守り機能を含めて宅配事業を中心に進める生協の役割が福祉インフラの一翼を担っていくと考えられます。一方で複数宅配から個別宅配へ移行増加によって生協の理念であるコミュニケーション機能が失われ、福祉機能が後退している現実も理解できた。経営的には、民間の宅配業者と同様にドライバーの確保、働き方問題等が深刻な課題となっていることと推察する。
- ・昔ながらの共同購入班というのはどんどん少なくなっている。今現在も運営や活動は昔からの組合員さんなどの一部の方のみで行われている。共働き世帯など、家庭の在り方も昔と変わりつつある今、生協の地域との関わり方も変わっていかなければならないと感じました。もし、自分も働きながら子育てをする立場になったとき、生協の活動に参加しないかと誘われても、多少の煩わしさを感じてしまうと思います。利便性を求めて宅配を利用するために組合員になる方とのそのギャップをどう埋めていくのか考えていきたいと思っています。

以上